



多民族国家 ラオス

山形県立山形東高等学校 1年 長澤パティ 明寿

人々の間に流れるゆったりとした時間。豊かな自然とメコン川の雄大な流れ。笑顔でサバイディーと挨拶を返してくれる人々。忘れることのできないカオニャオやラープの美味しさ。私はこの一週間の研修を通してラオスという国の大ファンになった。

今回私は多民族国家、ラオスという視点を持ち研修に臨んだ。ラオスで使われているお金1000キープ札の裏側には、低地・山腹・高地に住む少数民族の人々が描かれている。「私たちはラオスが49の民族全てによって形作られていると考えている。だから植民地時代に強制的に戦いをさせられた時以外に争いはなかった。国も平等に権利を与えてくれている。」ルアンパバーン伝統芸術民族センター職員・カム族出身の方の言葉だ。それを聞いて、多文化共生のため世界で共有すべき大切な価値観がラオスにあると強く感じた。

一方、ラオスの初等教育就学率は98.8%であり、残りの1.2%はラオ語の話せない少数民族の人々が大半を占めているそうだ。言語という文化の根底にあるものが障壁となり、生命を守るための教育を受けることができない人々がいるというのが現状である。文化多様性を守りながら質の高い教育を提供していくために何ができるだろうか。私にとって新たな課題ができた。

このような貴重な経験を得る機会を作って下さった JICA 関係者の皆様、そして研修中広い視野と良い刺激をたくさん与えてくれた仲間へ感謝したい。コープチャイライライ。